

平成23年度 人材力活性化の事例調査

○ 昨年度に引き続き、平成23年度も全国で事例調査を実施（12事例）

氏名	所属	実施日	概要
畦地 履正	四万十ドラマ社長	6/15	○「地域商社」として地域の商品開発・販売を実施 「産業づくりは地域づくり、産業づくりを行うことが地域の活性化につながる。」
梅原 真	梅原デザイン事務所デザイナー	7/7	○デザイナーとして商品開発・地域活性化に携わる 「自分が行動しているとき、もしくは行動しようとしているときに、話を聞いて、初めて有意義なヒントを得られるようになる。」
西上 孔雄	NPO法人すまいるセンター代表	7/8	○市民協働によるまちづくりに取り組む 「人(主体)を巻き込むには、やりたいこと＝「生き甲斐」をうまく作ることができるかがポイント。そして、やらされている感をいかに薄め、自主性を芽生えさせるかも大切。」
堂園 晴彦	堂園メディカルハウス院長	9/8	○ボランティア研修を通して「心ある医師」の育成に従事 「人材育成には「場」が重要。「場」の持つ力・雰囲気により、感じる事、考えさせられることなど人材育成に大きな影響を与える」
木場 一昭	錦江町総務課長	9/9	○インターン事業等を活かしたまちづくりを企画 「インターン事業を始めるためには、地域住民との協力体制の構築が必要。そのためには自ら率先して汗をかき、それを地域住民に認めてもらうことでフォロワーを生み出す」
松本 東亜	菊陽町産業建設部長	9/30	○町職員として、地域協議会づくりに従事 「うまく地域の人をほめて巻き込む。アドバイスは目立たないところで行う。そうすることで、住民に責任感が出て、役場に提案を行うという雰囲気になる。」

平成23年度 人材力活性化の事例調査

氏名	所属	実施日	概要
時松 辰夫	アトリエとき代表	10/1	○地域に根ざし、地域に貢献する木工デザイナーを養成 「技術を向上するだけでなく、社会と向き合い、地域にとって必要な人材になることが重要。」
藤目 節夫	愛媛大学法文学部前教授	10/21	○大学退職後も、リーダーとして地域の活性化に取り組む 「まちづくりの原点はコミュニティにある。コミュニティでは、住民全員が参加者になることが出来る。」
若松 進一	人間牧場主宰	10/21	○「人間牧場」を主宰し、地域の人材を育成 「行政は人づくりに距離を置くのではなく、まちづくりと併せて人づくりに対しても、どうすべきか戦略を立てて取り組む必要がある」
ジェフリー・S・アイリッシュ	鹿児島国際大学准教授	11/16	○民俗学を専攻し、地域での活動を通じて学生を育成 「既存の評価を受けていない地域を、自らの目で見えて評価することが、学生にとって勉強になる。」
西出 覚	大台町企画課	11/18	○地域と向き合い、住民参加のまちづくりを実践 「1人で出来ることは限られている。多くの住民を結びつけ、責任感を持って主体的に取り組んでもらえるように役割を見出し、あげることが役場職員である自分の役割。」
白鳥 靖	日本生産性本部主席経営コンサルタント	12/1	○旧今市市の「報徳塾」で、一般市民を育成 「一人一人のレベルに合わせて1対1の個別指導を行い、受講生が自立して、自己実現と社会貢献を達成することが重要。」

分野	地域ビジネス、人材交流	訪問日	平成23年6月15日(畦地氏)、7月7日(梅原氏)
----	-------------	-----	---------------------------

氏名	畦地 履正 (あぜち りしょう)、 梅原 真 (うめばら まこと)		
所属・役職	株式会社四万十ドラマ 代表取締役(畦地氏)、梅原デザイン事務所 所長(梅原氏)		
活動	<p>(畦地氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●四万十川流域の資源と人材を活かし、四万十川に負担をかけないというコンセプトやストーリーを明確にした独自の商品を数多く開発・販売し、道の駅を経営 ●地域で育んだ商品開発ノウハウを他地域へ移転する等、地域外の取組と積極的に交流 ●地域ビジネスに意欲を持つ人材の受入、育成(インターン事業)を実施 ●都市住民と地域住民を対象にした会員制度「RIVER」や、四万十川流域の観光拠点を結ぶ「四万十また旅プロジェクト」といった、四万十川流域全体の振興を推進 <p>(梅原氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本全国で一次産業や地域活性化に関するデザインを手がける 		
取組の契機	<p>(畦地氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●デザイナーの梅原真氏から、栗や茶、鮎といった地域の資源に目を向けるよう、アドバイスを受け、本業の傍らお茶のイベントを実施したところ、成功を収めた。 ●四万十川中流域の3町村が、地域で商品開発、販路開拓、人材育成を行う第3セクター「株式会社四万十ドラマ」を設立することとなり、応募して唯一の常勤職員に選ばれた。その後、ネットワークを培いながら、本質の「芯」を明確にし、本質を具体化する取り組みを積み重ねている。 		
活動のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●「芯」が出来ると、自然につながりや流れが出来て発展する →商品ではなく、考え方を流通させる。ぶれない本質のコンセプトで、賛同者を募る。 ●産業づくりは地域づくり、産業づくりを行うことが地域の活性化につながる →地域と人が循環する仕組みができると、風景を守り地域を再生することにつながる。 ●地域づくりはリレー方式、人を育てるしかない →人を育てるためには、冒険が必要。失敗をしても現場で経験を積ませる。 		

人材力活性化の取組内容

人材像	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の内外から賛同者を募り、集まった人をつなげるプロデューサー ●コンセプトを明確にし、かたちをまとめるデザイナー ●地域の人を支える地域外の人材 	
対象・連携先	人材力活性化の取組内容	ポイント
1 対象:地良 いづくり や地域ビ ジネスの 実施主体	<p>デザインにより地域の活性化に貢献</p> <p>高知県をはじめ日本全国で、一次産業や地域活性化に関するデザインを手がける。</p> <p>商品や地域の魅力や本質を見出すコンセプトづくりと、ストレートなデザイン手法により、数々の成功事例を生み出している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●自分が行動しているとき、もしくは行動しようとしているときに話を聞いて、初めて有意義なヒントを得られるようになる。 ●自分の考えやスタンスを持ったうえで、集まり、話をする必要がある。

2	対象： 実施主体	取り組みの「芯」を明確にする(畦地氏、梅原氏) (株)四万十ドラマの事業計画を策定する際、デザイナーの梅原氏と、「ローカル、ローテク、ローインパクト」というコンセプトを作り、事業の形態として、産業とネットワークづくりという「芯」を考えた。	●「芯」ができると、後は枝葉の応用で発展する。自然とつながりと流れが出来る。
	連携先： 地域の生産者、都市住民、行政	その後、四万十川の保全やリサイクル、環境といったコンセプトに合う商品を開発し、本質を具体化する取組を積み重ねている。	●商品ではなく考え方を流通させる。
		地域づくりとしての「産業づくり」(畦地氏) 四万十ドラマに関わりのある、地域の生産者たち自身が、地域ビジネスに取組むようになり始めた。 地域の人を地域ビジネスに導く際、うまく(数値)目標を立てるようにし、それを達成すると、次の展開につながる。地域と人が循環する仕組みができると、最終的に風景(田畑や森林等)を守ることに繋がる。	●背景やストーリー、思いのない取組は、生産者も販売者も他人任せになる。
		地域を担う人材の育成(畦地氏) リーダーとなる地域の人材は、感性が必要。現場での経験を積み、枠を超えた応用が出来るようにならない。	●産業づくりは地域づくり。産業づくりを行うことが、地域の活性化や風景を守ることに繋がる。
			●目標を立て、それを達成できると、次につながり、地域の人を地域ビジネスに導くことが出来る。
			●地域づくりはリレー方式。人を育てるしかない。
			●人材育成のためには、冒険が必要。失敗をしても、現場に行かせて自分でやらせる。
3	対象： 他地域の 実施主体	他地域へのノウハウの移転(畦地氏) 平成21年度より、全国の地域ビジネスや地域活性化の事例に対して、ノウハウ移転事業を実施し、商品開発等に結び付けている。	●自分たちの取組の本質を明確にすることで、他地域とのアライアンス(提携)が可能になる。
	連携： 他地域の 実施主体	自分たちの取組の本質を明確にすることが出来たので、他地域とのアライアンス(提携)ができるようになった。	
4	対象： 地域外の人材	地域外から来た人材の育成(畦地氏) 廃校に10~20名ずつ、1か月間滞在して、地域ビジネス等を体験するインターン事業を実施。90名の参加者から、13名が定住している。	●地域の外から来る人材は、肚が据わっており、地域にとって良い刺激になる。
	連携先： 地域住民、 他地域の 実施主体	地域の外から来る人材は、肚が据わっており、地域にとって良い刺激になる。	

(参考)「株式会社四万十ドラマ」<http://www.shimanto-drama.jp/>

分野	まちづくり・福祉	訪問日	平成 23 年 7 月 8 日
----	----------	-----	-----------------

氏名	西上 孔雄 （にしがみ よしお）
所属・役職	すまいるセンター代表、泉北ニュータウン学会事務局長、西上建設代表取締役
活動	<p>●平成 12 年度、介護保険施工の年の 4 月に、医療や福祉関係者と泉北ニュータウン近郊の企業が集まり、「すまいるセンター」を設立。「泉北ニュータウン近郊に住む全ての人々の生活の質の向上を目指す」を目標に、泉北に関わりのある一般市民や市民活動団体、行政、学校関係等様々な主体の参加のもと、泉北地域に住む人達の手で、自分達の住む「まち」を良くする活動へとつないでいけるような拠点として、市民協働によるまちづくり活動やコミュニティづくり、市民活動の祭典「みどりのつどい」などに取り組む。</p> <p>●平成 18 年度、泉北ニュータウンに住む多くの大学教授や専門家と市民と一緒に活動できる場として「泉北ニュータウン学会」を設立し、泉北ニュータウンに住む高齢者と子どもたちをつなげる企画（文科省事業）を実施。これにより、自分の孫みたいな子ども達の世話をするという環境をつくるのが、団塊の世代の人々にまちでいかに活躍してもらおうか考えたとき、一番有効な手法であることを痛感する。</p> <p>この活動を発展させ、現在「花植えて、安心できるまちづくり、ひとづくり」プロジェクトに取り組む。子ども達が柵・美木多駅前でフラワーポットの花植えの作業を行い、高齢者が日々の世話をする当事業を通して、駅前の環境美化と防犯、子供の心の教育に貢献。その他、障害者が安心して暮らせる街にと「みなみかぜスマイルねっと」も立ち上げ、障がい者施設で作られたクッキーなどを販売するカフェをオープンし、地域の情報発信の場となるよう力を注いでいる。</p>
取組の契機	●介護保険施工に伴い、介護施設を営んでいる知人と『お年寄りのよろず相談所』として「すまいるセンター」を設立し、高齢者がイキイキと長生きできる環境づくりに取り組む。
活動のポイント	<p>●コミュニティづくりには、仕掛けが必要 →同じ趣味・考え・思いの者を集めることが重要であり、そのための「集める場づくり」が大切。ひとたび集まると、自然と社会貢献し出すなど「公」と同じような行動をとる →コミュニティには、マンパワーが重要。自治会長などのやる気のあるリーダーとそれを支えるフォロワーであるキーマンがいるとうまく活動できる</p> <p>●多くの地域資源をつなぎ合わせ・発展させることができる人材がリーダー →地域資源に関する多くの情報を集め、そこに大学教員などの専門家のアイデアをミックスさせることで事業を発展させる。また、事業を回しながら構築したネットワークを活かし、人材集めをすることで、様々な活動につなげることもできる</p> <p>●人（主体）を巻き込むには、やりたいこと＝「生き甲斐」をうまく作ることができるかがポイント →やらされている感をいかに薄め、自主性を芽生えさせるかが大切。そのためには、大学などからアドバイスをもらうことも効果的。「楽しみながら活動する」、それをいかに仕掛けるか。それができれば、人が集まり、人材の育成につながる</p>

人材力活性化の取組内容

人材像		●様々な主体を巻き込むことができる人材	
対象・連携先		人材力活性化の取組内容	ポイント
1	対象及び 連携先： 行政、市民 活動団体、 学校関係 者、地域住 民	<p>市民協働によるまちづくり</p> <p>1 団体ではできないことが、複数の団体の利点を活かすことで実現可能となる。そのためには、地域住民、行政、NPOなどの市民活動団体、大学教員などの様々な主体と連携することが重要。</p> <p>行政とは、地域活動に思いを持った行政職員とつながったり、地域活動を継続的に実施することを通じて協力関係を構築し、行政から頼られる存在となることで連携が図られる。</p> <p>また、地域住民やNPO等だけでは実施が困難な取組にまとめ役として大学教員が加わることで、スムーズに展開が図れる場合がある。</p>	<p>●大学教員のバリューを活かすことが重要。</p> <p>●現状を見つめ直すことが重要。ニュータウンは高齢化が進行しているなど課題はあるが、様々な人材が一極集中している場と捉えることで、様々な主体と連携できる可能性がある。</p>
2	対象： 地域住民 連携先： 地域住民、 市民活動 団体	<p>地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティの連携</p> <p>地縁型コミュニティは地域に根ざした、伝統に裏付けされた存在であるが、高齢化が進行したり、若者の加入率が低下するなど課題がある。そこに、市民活動など活発なテーマ型コミュニティを連携させ、まちの活性化につなげるために、双方のコミュニティが参加する場を提供することが重要。そのため、市民活動の祭典「みどりのつどい」の開催などお互いの協力関係のもと活動する機会を企画した。</p>	<p>●泉北ニュータウン内のテーマ型コミュニティのひとつに、歴史を探求するものがあるが、参加者は男性ばかり。男性は、ひとつのものを追求しようとすることから、地域行事などに男性を参加させるにはこの点を活かすことも一考。</p>
3	対象： 子ども、高 齢者	<p>子どもと高齢者をつなげる活動</p> <p>過去に小学生、大学生、高齢者が連携して地域資源探しに取り組んだ結果、高齢者は、子ども達の世話をすることで、元気に活動することがわかった。そこで、現在、子どもと高齢者が連携して取り組める環境づくりに取り組んでいる</p>	<p>●子どもと高齢者による世代間交流による生き甲斐の創出。</p>

分野	福祉	訪問日	平成 23 年 9 月 8 日
----	----	-----	-----------------

氏名	堂園 晴彦（どうぞの はるひこ）
所属・役職	堂園メディカルハウス院長、NPO 法人風に立つライオン理事長
活動	<p>●インドのコルカタにあるマザーテレサの「死を待つ人のための家」にボランティア研修として参加した経験を医学生に伝えたい思いから、2001 年 11 月、NPO 法人「風に立つライオン」を設立。設立理念は「医療は医師と患者の信頼関係の上に成り立つ」。</p> <p>●心ある医師を養成するため、以下の取組を行っている。</p> <p>①「死を待つ人のための家」へボランティア研修</p> <p>②堂園メディカルハウスでの研修</p> <p>③今後「風に立つライオン」大学を設立し、合宿で医の倫理等を伝える</p> <p>●研修のほか、医師の養成として以下の点を大切に活動している。</p> <p>①医学教育は多彩で、多様でなければいけない。医者が医者を育てても限界がある →自身の精神病克服にあたり、色々な方のサポートに助けられたという経験のもと、様々な職業人が医学生を育てるということの必要性を感じた</p> <p>②「何を学びたいか」も大切だが、「どこで学びたいか」、「だれに学びたいか」がもっと大切である</p> <p>③一日を楽しむ人は花を活けよ、一年後を楽しむ人は花の種子を植えよ、十年後を楽しむ人は木の苗を植えよ、百年後を楽しむ人は人を育てよ（中国のことわざ）</p>
取組の契機	●「風に立つライオン」を設立した経緯は、厳しく指導してくれた良い上司に出会えたことで、人材育成の重要性に気づき、自身も後輩の育成に取り組むこととした
活動のポイント	<p>●二人三脚になって人材育成に取り組む覚悟が重要</p> <p>→研修において、大学生（若者）だけでは、浅い部分しか見えない・体験できないことになりがちであり、研修効果を高められない場合がある。そこで、助言し、指導してくれる人材が側にいることで、不要な迷いや脱線をすることなく、深い学びが可能となる。</p> <p>●人材育成には「場」が重要</p> <p>→例えば、命に触れる機会を作れば、命を大切に作る心を育成できる。「場」を作り出すことで、「場」の持つ力・雰囲気により、感じる事、考えさせられることなど人材育成に大きな影響を与える。</p> <p>●人材育成のサイクルを生み出す</p> <p>→人材育成は、育成された者の中から優秀な人材が生まれれば、その人材が次世代を育てる、というサイクルを生み出すことで、継続展開が期待できる。人材育成する者は、このサイクルを生み出すことを視野に活動することが重要。</p>

人材力活性化の取組内容

人材像		●人材育成の場を紡ぎ出す人材	
対象・連携先		人材力活性化の取組内容	ポイント
1	<p>対象： 大学生</p> <p>連携先： 研修施設、 大学</p>	<p>「死を待つ人のための家」でのボランティア研修の実施</p> <p>大学生（若者）は、技術的なことは理解できるが、思いを理解し、感じることができる人は少ない。そのため、人材育成には、様々な「体験」を通して、「感じること」・「気づくこと」を涵養することが大切であり、それには「場」の持つ力・雰囲気を活かすことが重要。</p> <p>ボランティア研修は、何かを見、それを言葉にし、ディスカッションすることを通して、思いや感動を深めるという「場」（機会）と位置づけて取り組んでいる。</p> <p>こういった「場」が様々なところで生まれてくれば、より深く、効果的な人材育成を可能とする仕組みが生まれ、また、継続的な人材育成の取り組みにも寄与するものと考えている。</p>	<p>●大学生は、知識や技術の習得は得意であるが、思いや感じたことを表現することが出来ない人材が多い。例えば、研修の感想を聞いても、「すごかった」という文章が多く、どういうところがすごかったのか、その理由・背景等が見えてこないケースが多い。そのため、コミュニケーションを図ることで、思いや感動を深めるという場（機会）が重要である</p>
2	<p>対象： 地域住民</p> <p>連携先： 地域住民、 市民活動 団体</p>	<p>交流の場を中心とした人材育成</p> <p>人材育成とはまちづくりであり、交流の場を通して展開していくものである。そのため、地域住民が集い、コミュニケーションできる場の提供を目的として、堂園メディカルハウスを拠点とした地域住民の人材育成への取り組みを進めている。</p>	<p>●人材育成する「場」が少ないことが人材育成における課題点。</p> <p>●交流を生み出すためには、拠点が必要。</p>

分野	まちづくり	訪問日	平成 23 年 9 月 9 日
----	-------	-----	-----------------

氏名	木場 一昭 (こば かずあき)
所属・役職	錦江町総務課長
活動	<p>錦江町では、国土交通省の事業である「地域づくりインターン事業」(※)に取り組んでおり、23年度で7年目をむかえる。</p> <p>当事業により、都市部の若者と地域住民との交流をとおして、これまで体験することができなかったこと、当たり前すぎて地域の良さに気づけなかったことなどを互いに認識してもらおう。また、都市部の若者の視点から、錦江町の客観的な課題分析及び提言などを受け、新たな地域づくりの参考とすることも目的とする。</p> <p>さらには、インターン生が錦江町の良き理解者となってもらい、今後も継続的な交流を行い、都市部と地域との交流が発展することを期待して本事業に取り組んでいる。</p> <p>木場氏は、合併後の2地域(大根占、田代)の交流を促進するための触媒的な効果を期待して、本事業の旗振り役として様々な調整、実際にインターン生の受入れも行っており、インターン生に対する農業体験や農家民泊(おじゃったもん亭)の取組をとおして、まちづくりに取り組んでいる。</p> <p>※地域づくりインターン事業 地域づくりに熱心な取り組みを行っている地域に、国土交通省が大学生や大学院生を中心とした20歳から35歳までの三大都市圏に居住する若者を体験調査員として派遣して、地域で進められている地域づくり活動や、地域産業の体験、地域住民との交流などに参加してもらい、地域の魅力を理解してもらうことをねらった事業。</p>
取組の契機	<p>●平成16年に全国地域リーダー養成塾(財:地域活性化センター主催)に参加し、小田切徳美(東大農学部教授:現明大教授)や宮口侗迪(早大教授)、北沢猛(当時東大工学部教授:H21死去)の教授との出会いがあり、合併後の地域づくりに活用できると考えた。</p>
活動のポイント	<p>●提案者が率先して取り組まなければフォロワーは生まれない →インターン事業を始めるためには、地域住民との協力体制を構築することが必要。そのためには、「塊より始めよ」の精神で、自らが率先して汗をかき、それを地域住民に認めてもらうことでフォロワーを生み出す。</p> <p>●インターン生とのネットワークを構築し、錦江町のファンを生み出す →学生が戻った後、それで終わりせず、定例的な集まりや錦江町からの情報提供を継続することで、インターン卒生との継続的に関わりをもち、全国に錦江町ファンを生み出す。</p> <p>●インターン生という「外の目」を活かしたまちづくり →インターン生を受け入れたことで、地域イベントへの改善提言、マイナスイオンマップの作成提言及び作成など、外部の若者からみた地域づくりや地域活動へのヒントを得ることができた。また、学生が滞在することで、受入家庭やその地域での交流が盛んになり、地域間交流の促進につながった</p>

人材力活性化の取組内容

人材像		●地域とともに事を興す人材	
対象・連携先		人材力活性化の取組内容	ポイント
1	<p>対象： 大学生</p> <p>連携先： 地域、大学</p>	<p>インターン事業を活かしたまちづくり</p> <p>インターン生を受け入れることで、地域住民との交流の輪が生まれ、地域間とのつながりが強まった。また、地域の励みにもなっており、「学生を受け入れたい」という地域住民が増えたことで、高齢者の生き甲斐の創出、出番の創出につながっている。</p> <p>一方で、インターン事業はあくまで「地域活性化」のためであり、学生の思い出づくりに留まることのないように留意して展開しなければならない。そのため、今後は、錦江町の良さを理解・体験してもらうことだけでなく、インターン事業を地域課題の解決を図るような取組と位置づけ、「学生個人」から「ゼミ・学部」との連携へと拡大を図り、地域と大学との連携を深める機会となることをねらう。</p>	<p>●町がインターンを行う以上、町に対するメリットがなければ意味が無い。インターンという体験の場が目的化してはならず、目指すべきものがあって、その達成のための手段としてインターンを活用する、というアプローチが重要。</p> <p>●地域が学生を受け入れるためには、受入地域の組織化が課題。そのため、公務員も地域住民の一人との意識を持ち、自らもインターン生の受入側に回ることで、地域と行政のつながりを強めている。</p>
2	<p>対象： 大学生</p> <p>連携先： 地域住民</p>	<p>農家民泊によるリピーターの獲得</p> <p>インターン生を農家民泊させる際、日常的に、遠慮無く、客人扱いしない。あくまで農村の日常、実態を経験してもらう。そうすることで、学生は心を開きやすくなり、地域に愛着をもち、リポーター化（現在までに約30名の学生が錦江町でインターンを経験しており、その半数以上が再来しており、第二の故郷的な存在となってきている）につながっている。</p>	<p>●学生は、農家民泊をとおして、今まで経験の無い「他人の家のルール」のもと生活することとなり、そのことが学生にとって新鮮に映っている。</p>

分野	まちづくり、自治会活動全般	訪問日	平成 23 年 9 月 29 日
----	---------------	-----	------------------

氏名	松本 東亜 （まつもと はるつぐ）、 矢野 誠也 （やの せいや）
所属・役職	菊陽町産業建設部長（松本氏）、菊陽町ボランティアガイドの会会長（矢野氏）
活動	<p>（松本氏）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●住民と行政の協働の仕組みをつくるため、「協働のまちづくり住民ワークショップ」（平成 19 年度）、「コミュニティ検討委員会」（平成 20 年度）、「協働の仕組みづくり職員プロジェクトチーム」（平成 20 年度）、「菊陽町協働の仕組み作り検討委員会」（平成 21～22 年度）を開催し、自治基本条例の制定を目指している。 <p>（矢野氏）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自治会長を務める中で、町名南部地域の他の自治会と連携して南部町民センターの設立に携わったほか、町内の歴史遺産「鼻ぐり井手」を研究する「菊陽町鼻ぐり塾」（平成 20 年～）、観光・文化資産としての活用を図るためのシンポジウムや「鼻ぐり井手築造 400 年祭」（平成 20 年）、「菊陽町鼻ぐり井手祭」（平成 21 年～）イベントを開催している。また、菊陽町文化財ボランティアガイドの会を設立し、ボランティアガイドの養成を行っている。
取組の契機	<p>（松本氏）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●前職である総合政策課長として、住民と行政の仕組みづくりや町内南部地域の地域づくりに携わる。 <p>（矢野氏）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●会社経営から退いた後、もともと自らが住んでいた地域に貢献したいという思いから、自治会活動に取り組むようになる。方言を使って、自ら進んで住民の中に入っていた。自治会長になってからは、住民の名前を記入した地図を持って、地域を歩いた。
活動のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●行政は、住民に対して対等・平等な視線を持つ →行政は、住民に対して上から目線やへりくだるのではなく、住民と同じ目線に立ちながら住民主導の活動を支援することが必要。 ●一歩引いて相手の話を聞き、一緒に考えて掘り下げる →自分の考えを押しつけるのではなく、相手の意見を聞くことが重要。一歩引いて相手の話を聞き、一緒に考えて掘り下げていく中で、同士としての感覚が芽生える。 ●専門家から学術的な裏付けを得ることで、活動に広がりが出る →地域にある歴史遺産の文化的・学術的な価値を明らかにすることで、地域内外にアピールする資源となるとともに、地域住民の誇りとなる。

人材力活性化の取組内容

人材像		<ul style="list-style-type: none"> ● 広く住民を巻き込んで地域活動の立ち上げ支援を行う行政職員 ● 住民ひとり一人の考えをくみ取り、他地域や行政と連携する自治会長 ● 学術的・専門的な助言を行う大学教員 	
対象・連携先		人材力活性化の取組内容	ポイント
1	<p>対象： 行政</p> <p>連携先： 地域住民</p>	<p>住民と行政の協働の仕組みづくり</p> <p>住民と行政の協働の仕組みをつくるため、「協働のまちづくり住民ワークショップ」（平成 19 年度）、「コミュニティ検討委員会」（平成 20 年度）、「協働の仕組みづくり職員プロジェクトチーム」（平成 20 年度）、「菊陽町協働の仕組み作り検討委員会」（平成 21～22 年度）を開催し、自治基本条例の制定を目指している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 住民が自ら活動するのが基本。 ● 行政は、住民に対して対等・平等な目線を持つことが必要。 ● 行政は、うまく住民を巻き込んで住民組織が立ち上がるまでは活動をリードし、活動が軌道に乗ったら裏方の支援に回ることが必要。
2	<p>対象： 地域住民</p> <p>連携： 他地域の地域住民、行政</p>	<p>自治会と行政による協働のまちづくり</p> <p>町内南部地域の 6 自治会が連携するとともに、行政と協働する中で、南部町民センターを設立した。</p> <p>現在は、南部町民センターを拠点にして、各自治会や婦人会が地域での活動を展開している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の中を常に歩くことが重要。そのうしている内に、役が自然と回ってきた。 ● 自分の考えを押しつけるのではなく、相手の意見を聞くことが重要。一步引いて相手の話を聞き、一緒に考えて掘り下げていく中で、同士としての感覚が芽生える。 ● 火を付けて、一緒に動いて汗をかく。
3	<p>対象： 地域住民</p> <p>連携： 行政、大学</p>	<p>歴史遺産を活用したまちづくり</p> <p>町内の歴史遺産「鼻ぐり井手」を研究する「菊陽町鼻ぐり塾」（平成 20 年～）、観光・文化資産としての活用を図るためのシンポジウムや「鼻ぐり井手築造 400 年祭」（平成 20 年）、「菊陽町鼻ぐり井手祭」（平成 21 年～）イベントを開催している。また、菊陽町文化財ボランティアガイドの会を設立し、ボランティアガイドの養成を行っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 手作りの活動だと、大勢が参加できる。 ● 専門家から学術的な裏付けを得ることで、活動に広がりが出る。

分野	まちづくり、自治会活動全般	訪問日	平成23年10月21日
----	---------------	-----	-------------

氏名	藤目 節夫 （ふじめ せつお）		
所属・役職	畑野川の里づくりグループ 事務局長（元・愛媛大学法文学部 教授）		
活動	<ul style="list-style-type: none"> ●退職後に移住した地域で、まちづくり団体「畑野川の里づくりグループ」を設立し、全員参加のまちづくりに取り組む ●松山市地域コミュニティ市民検討会議委員長を務めるなど、地域の自治会組織のあり方について、有識者として発言 ●愛媛大学では、法文学部教授としてコミュニティのあり方について研究を行っていたほか、松山市と連携しコミュニティ・リーダーを養成する「松山市地域リーダー養成セミナー」を主催 		
取組の契機	<ul style="list-style-type: none"> ●まちづくりの原点はコミュニティであるとの思いから、大学教員としてコミュニティのあり方について研究を行い、大学を退職後、自らまちづくりに携わることを希望していた。 ●大学退職後に移住した空き家で花を植えたところ、好評だったことから、住民が自らの家に花を植えることを中心に、まちづくりに取り組む。 		
活動のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●高齢者も含めてあらゆる地域住民が役割を持ってまちづくりに参加 →自分の住む知己で役割を持つことが、尊厳を持って生きていくために重要。地域に居場所を得るためには、可能な範囲で、知恵を使い、汗をかくことが必要。 ●大学は、研究、教育、地域貢献が柱 →特に、教授になったら、研究、教育だけでなく、地域貢献に力を注ぐ必要がある。 ●行政は、仕掛けを行い、地域が動き始めたら手を引くことが必要 →地域でまちづくりのきっかけを作り出すために、行政の仕掛けは必要。その上で、地域で住民が自ら動くようになったら、行政は手を引くべきである。 		

人材力活性化の取組内容

人材像	<ul style="list-style-type: none"> ●自治体活動等を通じて自らの住む地域で役割を果たすあらゆる地域住民 ●地域貢献に携わる大学教員 ●地域づくりを仕掛ける公務員 		
対象・連携先	人材力活性化の取組内容	ポイント	
1	対象： 地域住民、行政、議員 連携先： 地域住民、	移住した地域でまちづくりに取り組む 愛媛大学を退職した後、久万高原町畑野川地区の空き家に移住。自宅に植えた花が好評だったことをきっかけに、近隣の住民や町議を巻き込んでまちづくり団体「畑野	<ul style="list-style-type: none"> ●コミュニティでは、そこに住むあらゆる人が自分の役割を見出すことが出来る ●若い元気な人だけでなく、高齢者が自分の住む地域で役割を持つことが、尊厳

	<p>行政、議員</p>	<p>川の里づくりグループ」を設立し、自身は、事務局長として裏方に回って、グループの活動のサポートしている。</p> <p>同グループでは、地域住民全員が参加できるようにするため正会員と準会員を設けて、地区全戸が加入した。</p> <p>現在は、会員がそれぞれの自宅に花を植える「花夢の里づくり」を推進している。</p> <p>今後は、地域住民が、自ら楽しく愉快地に、誇りを持って暮らせる地域づくりをめざして、活動を継続していく見込み。</p>	<p>を持って生きていくために重要</p> <p>●地域に居場所を得るためには、それぞれが可能な範囲で、知恵を使い汗をかく必要がある。</p> <p>●地域住民が、楽しく愉快地に、誇りを持って暮らせる地域づくりを目的とし、地域に住むあらゆる人が、自分に出来る範囲の役割を果たす</p>
2	<p>対象： 地域住民</p> <p>連携： 行政</p>	<p>行政と連携し地域リーダーを養成</p> <p>平成16年度に、松山市に地域コミュニティの総合窓口として「市民参画まちづくり課」が設置されたことに関連し、平成17年10月から、松山市と愛媛大学法文学部が共同で、コミュニティのリーダーを養成する「松山市地域リーダー養成セミナー」を開催。</p> <p>同セミナーでは、見る力、考える力、計画する力の養成を目的として、フィールドワークを含むワークショップ形式で、毎月1回、年間12回開講し、毎年受講者数は増えている。</p> <p>また、セミナー開催と合わせて小さな自治の重要性を訴えるための市民を対象にしたシンポジウムを開催し、セミナー受講者がパネリストを務めたりしているほか、シンポジウム参加者からセミナー受講生が出てくるなどしている。</p>	<p>●大学は、研究、教育、地域貢献が柱。特に、教授になったら、地域貢献を行うよう心がけるべき</p> <p>●行政は、仕掛けを行い、地域が動き始めたら、手を引くことが必要。</p>

分野	人材育成	訪問日	平成 23 年 10 月 21 日
----	------	-----	-------------------

氏名	若松 進一（わかまつ しんいち）
所属・役職	人間牧場主宰
活動	<p>若松氏のまちづくりの基本コンセプトは人づくり、拠点づくり、住民総参加の3点。</p> <p>【人づくり】 「知識でまちおこしをするな、知識と知恵は違う。」単なる知識ではなく、人と人との語らいで生まれる知恵を重視し、家の敷地内に「煙会所」という私設公民館を開き、まちづくりを志す者達と町の将来像について熱く語り合い、そこで生まれたアイデアは、多くの住民を動かし、成功を取めて行く力となっている</p> <p>【拠点づくり】 平成6年に地域振興課長となった氏は、「しずむ夕日が立ちどまるまち」というキャッチコピーのもと、人々の交流の拠点として、平成7年に複合施設（シーサイド公園、潮風ふれあい公園）を手がけるなど、まちづくりに取り組む。</p> <p>【住民総参加】 「他の市町村を見習わない。見習ったら規模の大小の勝負になる。オンリーワンなら、自分たちの汗と知恵があればできる。」氏は夕日・花・ホタル・めだか・水辺などの自然とそこに住む人間が融合共生するという、アメニティのまちづくりでオンリーワンを目指し、次々とアイデアあふれる企画を打ち出し成功させている。</p> <p>現在は、瀬戸内海を一望できる双海町の地に「人間牧場」を開設、年輪塾や二宮尊徳セミナーなどの開催をとおして人材育成に従事している。</p>
取組の契機	<p>●町役場で公民館活動を通じて社会教育に打ち込む姿がメディアに取り上げられた際、取材に来たディレクターが夕日を見て「こんな夕日は初めて」と感慨深げに語ったことがきっかけで、なにげなく眺めていた自分の故郷の夕日の美しさの価値を、外部の人に気づかされたことで、夕日をコンセプトにまちづくりに取り組むこととなった。</p>
活動のポイント	<p>●行政は人づくりに対して戦略を立てて取り組むことが必要 →人づくりは結果が出にくい・見えにくい、予算が付きにくいなどの理由で行政による積極的な取組はなされていない。しかし、地域を動かし、活性化させるのは人材であって、その重要性を認識し、戦略的に取り組んでいくことがまちづくりにも繋がっていく。</p> <p>●リーダーは「夢」を持ち、語る事が大切 →「夢」とは非現実的なものではなく、具体的な目標として位置づけ、実現化を図るためには夜を徹して仲間と語り合い、お互いを高め合いながら、先導していくことが大切。</p> <p>●まちづくりに取り組むに当たり、「はじめる」「つづける」「高める」「やめる」のサイクルが重要 →特に「やめる」ことを真剣に考えないで惰性的に取組を続けても得られるものは少なく、疲弊しかねない。「やめる」ことはすなわち「新しいものが生まれる」ことであり、「やめる」ことを決断できることがリーダーには求められる。</p>

人材力活性化の取組内容

人材像		●地域のことを思い、語り合うことを通して地域を導く人材	
対象・連携先		人材力活性化の取組内容	ポイント
1	<p>対象： 地域住民</p> <p>連携先： 地域</p>	<p>人材育成の拠点づくり</p> <p>人材育成には、膝をつき合わせて、自分達の思いや考えをぶつけ合う拠点が重要である。時として、昼夜問わず語り合うことは、お互いの理解を促し、目指すべき方向性を明確化し、一致団結した取組につながっていく。</p> <p>これにより、まちづくりに一体感が生まれ、誤った方向に進むことなく、また、反対者も協力者になり、取組を後押ししてくれる強力な存在に生まれ変わることに繋がる。</p> <p>また、語り合いがきっかけとなり、「自分の意見」を持っている人材を見つけ、将来の地域のリーダーとして育て上げることができる。</p>	<p>●夕日のまちづくりについて、夕日＝沈むということからマイナスを連想がちであったため、当初は100人中99人は反対側であった。しかし、強い信念をもって、お互いの意見を語り合うことで、徐々に反対者から賛同者に変化していった。</p> <p>反対者ほど、熱意と行動で示すことで仲間に加えることができれば、まちづくりを進める上での大きな力となる。</p> <p>●若者を活動に取り込むことは地域の活性化に繋がる。若者を動かす際に必要なことは「楽しい」「美しい」「新しい」の3つの要素である</p> <p>●後継者育成を考えた場合、自分のコピーを作ろうとしてもうまくいかない。むしろ、自分の意見に反対する人材の法が、自分をもっている証拠であり、気概あるリーダーとなりうると考える</p>
2	<p>対象： 若者</p> <p>連携先： 地域</p>	<p>「人間牧場」によるふるさと教育の推進</p> <p>まちづくりは人づくりであり、そこから故郷を愛する心を持ち、まちを出て行っても故郷のことを誇りに思える人材を育成しようとふるさと教育の推進を図っている。</p>	<p>●若いときにふるさとを強く思うことが大切であり、ふるさとを思う気持ちがあれば、困難に直面した際の下支え、心の拠り所となる。</p> <p>●また、ふるさと教育は、地元の元気づくりにも繋がる。</p>

分野	人材育成、人材交流	訪問日	平成23年12月1日
----	-----------	-----	------------

氏名	白鳥 靖 （しらとり やすし）		
所属・役職	公益財団法人日本生産性本部 主席経営コンサルタント		
活動	<p>●今市市（現・日光市）が開催した市民大学校「報徳塾」（平成9～12年）において、主任講師として、3年間で43名の受講者を指導した。</p> <p>●「報徳塾」開設の目的は、自己に目覚め、今市に目覚め、今市を愛し、今市の将来を支えていく、新たな視点に目覚める「人」・「企業家」を生み出すとともに、徳に報いる精神を培いながら、国際的視野に立って、きらりと光る今市の将来像を描き、まちづくりのリーダーとなりうる人材の育成を図ること。</p> <p>●受講者の自己開発、自立を通じた人づくりを行うことを目指して、個別面接を行ったうえで一人一人の知力・体力・能力に合わせて目標を設定し、それぞれのテーマに応じた個別の研究指導を行った。</p>		
取組の契機	<p>●「報徳塾」開設に際して、福田昭夫市長（現・総務省政務官）から、公益財団法人日本生産性本部に講師の要請があったことから、主任講師に就任した。</p> <p>●市事業の終了後も、「報徳塾OB・OG会」に参加し、OB・OGが目標を持って自己研鑽することを継続して支援している。</p>		
活動のポイント	<p>●受講者の個性を尊重し、1対1で個別に研究指導を実施 →横並びの評価をせずに、個別に指導することで受講者の自己実現を図った。</p> <p>●個別に目標を設定することで、受講者が自ら定期的に成長と自立を確認し、自己実現と社会貢献を同時に果たせるようになる →受講者が、自らの目標を設定し、定期的に反省を行うとともに将来のすがたを思い描くことで、成長と自立を自覚できるようにした。また、地域の特性に合わせて自身の果たせる役割を自覚し、社会貢献と自己実現を同時に果たすことにつながった。</p> <p>●目標を持ってまちを知り、行政との接点を持つことで人生が豊かになる →受講者の多くが、事業終了後も行政と協働しながら地域のキーパーソンとして活躍している。</p>		

人材力活性化の取組内容

人材像	<p>●自ら目標を設定して自己研鑽を継続する地域住民</p> <p>●受講生一人一人の個性に合わせて個別指導を行う指導者</p> <p>●人材育成事業を主催し、事業終了後もOB・OGと連携する行政</p>		
対象・連携先	人材力活性化の取組内容		ポイント
1	対象： 地域住民	市民大学校「報徳塾」で受講者を指導 今市市（現・日光市）が開催した市民大学校「報徳塾」（平成9～12年）におい	●それぞれの受講生の個性を尊重し、横並びの評価をせずに、1対1の指導を行った。

<p>連携先： 行政</p>	<p>て、主任講師として受講者を指導した。</p> <p>受講者43名の職業は、民間企業、農業、公務員、教職員、農業、主婦等と様々であった。</p> <p>受講者の自己開発、自立を通じた人づくりを行うことを目指して、個別面接を行ったうえで一人一人の知力・体力・能力に合わせて基本目標を設定し、それぞれのテーマに応じた個別指導を行った。</p> <p>1年目は、多面性を象徴する生物として首が360°回転するフクロウをテーマに共通課題研究をグループで行い、「報徳塾」の目的と研究の方法を学んだ。</p> <p>その後、2年目までは類似する個人研究課題を持つ受講生によるグループ研究と個人指導を合わせて実施した。</p> <p>最終年（3年目）は、各受講生が個別研究を完成させて、報告書を作成した。</p> <p>事業終了後は、受講生が自主的にOB・OG会を設立したほか、市が実施する「朝市」や「とことん今市探検ツアー」などのイベントに主体的に携わったりするなど、地域のキーパーソンになっている。</p>	<p>●受講者が、それぞれの目標を設定し、定期的に反省を行うとともに将来のすがたを思い描くことで、成長と自立を自覚できるようになった。また、地域の特性に合わせて自身の果たせる役割を自覚し、社会貢献と自己実現を同時に果たすことにつながった。</p> <p>●自分自身の目標やテーマを持って、まちを歩き、行政との接点を持つことで、受講生の人生が豊かになった。</p>
--------------------	--	---